

「そもそも革命ってのは、その腐ったやつらの息の根をとめることなんだよ。友だちになるんじゃないくてね」

ホールは墓場のように静まりかえった。学校の中で、これほど卑劣なことが吐かれたことはなかった。もういじわるなどというものではない。本物の悪意だ。

心臓が激しく打ち始め、ファリンは息苦しくなった。

そのとき、サディーラがさつと腕を組み、ファリンをその場からつれだした。

「きょうはすばらしいお天気ね。そして、わたしたち、最高に幸せだわ」とサディーラがやわらかくいった。

ファリンは、腕に巻かれたサディーラの手に分自分の手を重ねた。

てのひらにサディーラの指を感じていると、波立ったファリンの心は、しだいに凜いでくるのだった。

10

その日は、ワインでも飲んだように愉快だった。

この表現が何かの本にでもあったのか、自分で思いついたものなのか、ファリン自身にもわからない。そもそも、ワインを飲んだことすらない。人がアルコールを飲んだらどんなにだらしなくなるかささん見てきたから、飲もうとも思わない。

それでも、この表現はきょうの気分にぴったりだ。

きょうはワインでも飲んだように愉快。ファリンの心はさつきから歌いつづけていた。

ファリンを乗せた車は、太陽がさんさんと降り注ぐ中、ハイウェイをすべるように走っていた。母親を家に残して。